

道路遺構の考古学的検討に向けて

—京都大学構内遺跡での検出事例から—

伊藤淳史

1 はじめに

京都大学吉田キャンパスの本部構内には、現在は「志賀越え道」「山中越え」などと呼ばれている、京の荒神口から近江とを結ぶ交通路「白川道」がはしっていた。幕末に尾張藩邸が設けられたことで途絶し、そのまま大学の敷地となり現在に至るが、発掘調査では、最も古いものは平安後期ころまでさかのぼる各時期の路面が確認されている。また、白川道以外でも、吉田キャンパス全域で、おもに中～近世を中心とするさまざまな道路遺構が報告されている。しかしながら、白川道については関連する文献史料からの検討がみられるものの⁽¹⁾、ほかにも蓄積された多様な遺構データは個別の報告でとどまり、考古資料としての検討が進められる基盤が整っていない。そこで本稿では、京都大学吉田キャンパス内の発掘調査で昨年度までに検出されてきた道路遺構の調査事例を集成整理し、研究の基盤を据えることを第一の目的とする。そのうえで、試行的に遺構の分類を提出し、今後の考古学的な研究遂行に向けた課題を浮上させることを、第二の目的とする。

2 京都大学構内遺跡検出の道路遺構

吉田キャンパス全域での道路関連遺構を集成した(図58・表3)。このうちには、舗装や轍の確認される明らかな道路遺構から、硬化面や側溝とみられる溝が部分的に遺存するのみという程度のものまであり、路面と報告されていないが筆者が可能性ありと判断したものも含んでいる。以下、白川道関連とそれ以外に分け、概観する。

(1) 白川道にかかわる事例

本部構内と医学部構内の多数の地点で確認されている。また、医学部北側をはしる道路(現在も志賀越え道と呼称されている)における立会調査でも近世路面の遺存が京都市埋蔵文化財研究所により報告されている。これらのうち、路面の全幅がある程度把握可能な事例が報告されるのは本部構内の一部の発掘調査(西から277・296・181・57・90・168地点)にとどまる。また遺構の帰属時期では、中世と近世がほとんどであるなかで、最も遡る277地点の路面SF4では、12世紀前葉には成立し、11世紀代に遡る可能性も示唆され

ている。こうした確認地点を結んで復原される道筋は図58のごとくであり、中世以前の路面は比較的直線的に西南西－東北東方向にはしているのに対して、近世については本部構内時計台付近で大きく北に振れたのち東北東に向かっており、カーブがきついルートとなっている。296地点での所見によれば、勾配を緩和するために微高地となるその地点付近を避けて北側に迂回したものと推測されている。

中世路面の特徴（図59） 中世段階の白川道の全幅が把握される事例のうち、296地点と277地点で検出されている前半期（おおむね12後葉～13世紀代）に比定されるものとみると、側溝をともなう幅員は3m強程度の規模で、硬化した粗砂が路盤となること、微高地側の地山を切り通し状に削り出して造成している、といった点が共通している。一方で中世後半期についてみると、168地点では、層序的に14世紀代とみられる路面が確認されているが、最大幅4.5mと大規模で、細い溝状の轍が認められ、礫を敷き詰めて砂質土で覆い叩き締めるといふという舗装のあり方など、異なる様相がうかがえる。ただし、同じ中世後半期でも、296地点の路面S F－Nでは、砂礫層の路盤で幅は3m前後であることから、前半期から後半期へと様相が変化すると、単純には見なせないといえる。

近世路面の特徴（図60） 近世段階の白川道は、18世紀代以降幕末期までが明瞭に確認されるが、それに先行する段階は不詳である。全幅が把握でされる277地点や181地点の事例では、小礫を叩き締めた舗装による路盤が、側溝を伴いながら5面程度検出でき、多くは幾重にも重なる深い轍をともなっているが、最上面では認められない。規模は、277地点で5～6m程度、181地点では当初4.5mであったものが新しくなるに従い1mほど縮小していくとされる。いずれにしろ、中世段階に比べると、深く大きな轍が形成されることと、舗装が堅固になり、幅員も大規模となって側溝の護岸も管理されていることは確かである。

上記してきた白川道の中世と近世のあり方の違いを積極的に解釈するならば、中世段階は徒歩ないし馬による交通であって、直線的なルート設定が優先されたのに対して、大規模な轍の存在が明瞭に示すように、近世には大八車を使用した重量物の運搬であって、堅固な舗装の繰り返しと勾配の回避が重視された、といえよう。この場合、轍内に礫や砂質土が充填された様相は、近世東海道などでみられるような「車石」舗装の事例などを考慮すると、補修というよりも車輪の通り筋を意図的に設定して舗装して、同一路面でも轍の錯綜する範囲が車道、その脇の平坦面を人道としたと見ることもできよう（図4）。

京都大学構内遺跡検出の道路遺構

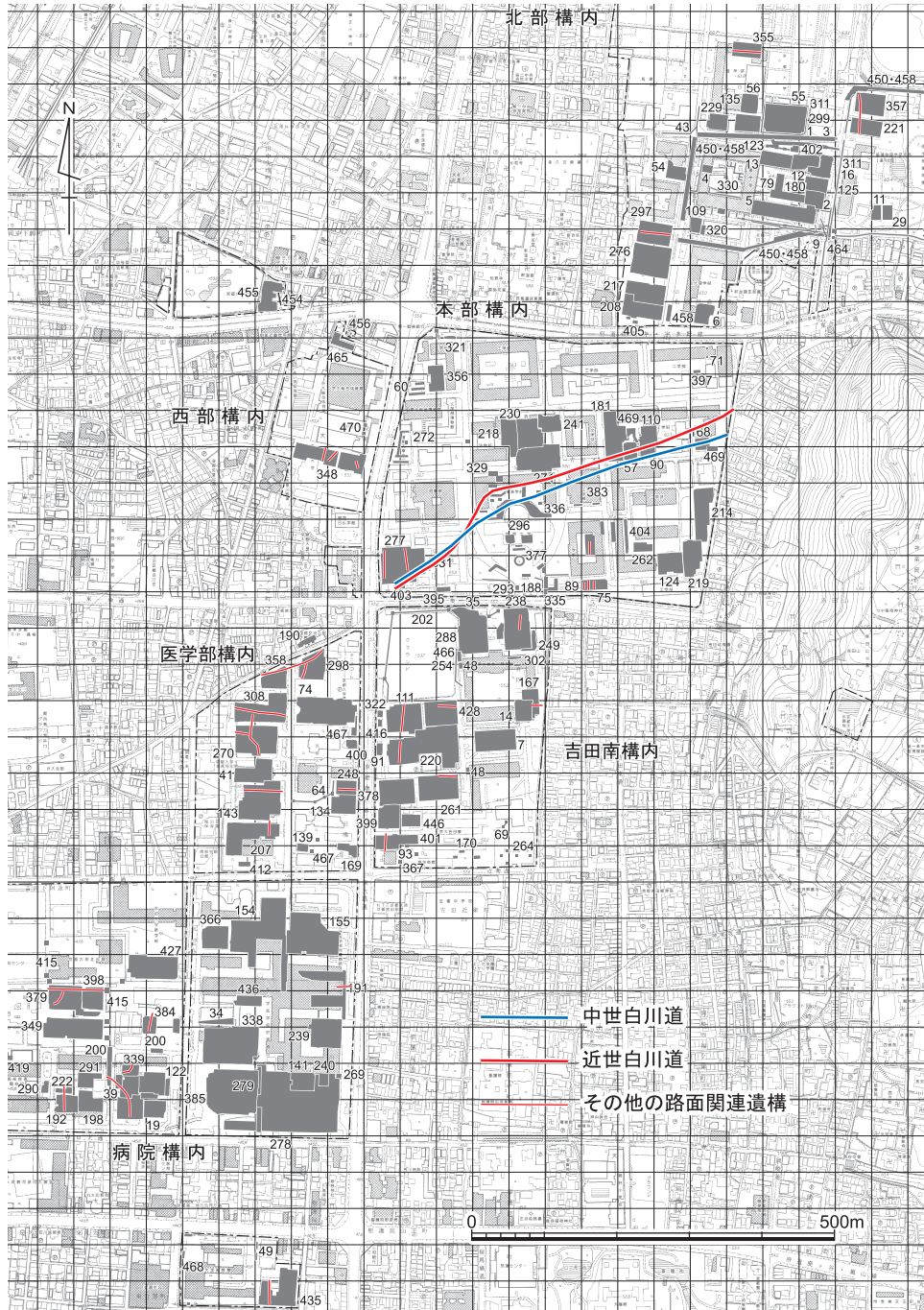


図58 吉田キャンパスにおける道路関連遺構の検出地点 縮尺1/10000

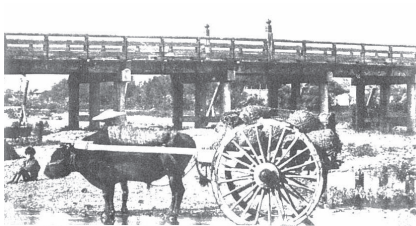
道路遺構の考古学的検討に向けて



図59 中世白川道路路面の状況（296地点北調査区） 左：平面を西から，右：断面を東から
*12世紀後葉～13世紀代（SF-S）と14世紀～15世紀前葉（SF-N）の2枚の路面が重複する。粗砂を主体に叩き締めた路盤で，上面に轍に相当するとみられる浅い小溝群が，不安定ながら筋状に検出されている。側溝も護岸の不安定な自然流路の様相を示す。



図60 近世白川道路路面の状況（277地点） 左：平面を東から，右：断面を東から
*18世紀～19世紀前半を中心とする砂礫を突き固めた複数の路盤が積み重なり，それが無数の轍で削られている。轍の内部には礫が充填されるものがみられる。側溝もしっかりと護岸される。



：荒神橋の下を行く牛車
明治時代 京を語る会・田中泰彦編集・解説『京都悠情』より



牛車と車石模型 真田孝男氏製作

図61 牛車と車石

（出典：『車石（くるまいし）：江戸時代の街道整備』大津市博物館企画展図録2012年）
*近世後半の東海道・竹田街道・鳥羽街道には，牛車の車輪を通すための凹みを設けた軌道状の敷石「車石」の存在が知られている。

(2) 白川道以外の事例

特徴は多岐にわたるが、具体例は次節において試行する分類とあわせて示すこととする。最も遡る時期の遺構は297地点のS F 1で、10世紀半ばに比定されている。東西方向に直線的な路面であり、白川道に相当する道路として最も古い事例となる可能性も残されている。これ以外の事例は、多くが近世であり、『山城国吉田村古図』⁽²⁾などで把握されるようなかつての字界などに対応する位置に検出されていることが多い。そして、中世に遡る段階のものも、近世段階の路面と同じ位置で下面に確認される傾向が強いことから、近世における土地境界の骨格は、中世のある段階までは遡って成立していることを知る事ができる。今後は、その時期の比定をより絞り込み、地域社会における画期の存否や、広域な社会変動との連関を検討していくことも、課題となろう。

3 発掘道路遺構の分類試行と課題

前節で集成した道路遺構を、考古資料としてどのような視点で分類することがふさわしいだろうか、ここで試行し、その意味と課題を考えたい。

まず、道路遺構にともなう属性で、平面的な調査範囲が大きくなり、断面からも認識しやすいと考えるa舗装・b側溝・c轍を抽出する。舗装については、礫主体と粗砂主体が認められるようであり、側溝についても、自然流路状のものと人為的な管理が明らかなのとで区別できるのが望ましいと考えるが、現況は明確な細別は困難であることから将来的課題としておきたい。また、轍についても規模や充填物には、先述したように多様なあり方が観察されるが、同じく細分は今後の課題である。ほか、幅員の規模や造成手法（地山の削出しや切り通し、あるいは盛土等）も特徴として把握されるが、部分の遺構検出では不詳とせざるを得ず、分類指標の属性としては未整理である。

以上述べたような属性や特徴については、集成表3においても有無を示しているところだが、その結果をふまえ、試行的に分類A-Fを作成した(表2)。分類にともなう「ランク」については、武部健一の整理(図62)等を参考に名称を付したもので、幹線道路のなかで、現代の高速道路に相当する性格とみなせる計画的な「駅路」を「計画基幹道」とした。古代の官道、都城であれば中枢的な大路といった国家的な計画・管理道を意識するもので、吉田キャンパスで該当するものは、現在までのところは明確に確認されていないと考える。今回対象となるのは、武部の整理で言えば伝路(地域道路)の範疇であり、そのなかで地域間を結ぶ幹線道Bが、白川道にかかわる道路遺構にほぼ該当するといえる。

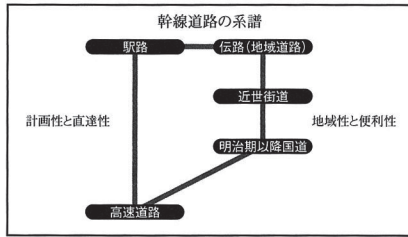


図2-9 高速道路の古代回帰の図式

図62 幹線道路の系譜 (武部健一による)
 出典：武部健一『道路の日本史－古代駅路から高速道路へ』(中公新書2321) 2015年

表2 発掘道路遺構の分類試案

ランク	属性	属性					公共度
		舗装	側溝	轍	空間	関与・管理	
A	計画基幹道	◎	◎	○	全域	政権	高い
B	幹線道	◎	◎	○	地方間	地方首長・権門	
C	補助幹線道	○	○	△	地域間	地域首長・宗教権威	
D	地域道	○	△	△	地域内	地域住民(村落)	
E	里道	△			地区内	地域住民(部落)	↓
F	私道	△			宅内	使用者	低い

◎：ほぼすべてにともなう／○：なかば以上ともなう／△：稀にともなう

補助幹線道Cも、それに準ずる属性を備えているもので、白川道から直接分岐する本部構内277地点のSF3や、おそらく白川道から北へ分岐して洛北・比叡山麓方面とを結ぶ北部構内の221地点・357地点の南北道路SF1などが該当すると考える(図63-1)。

地域道Dや里道Eとしたものは、構内遺跡で最も頻繁に検出されている、旧字界や耕地境界をはしる路面である。このうち、旧聖護院村と吉田村境をはしる病院構内398地点の路面SF3や、二本松と近衛の字界を成している吉田南構内261地点の路面SF1(同2)、窪と走り矢倉の字界である111・220地点のSF1(同3)などのように、礫や砂による舗装が施され、側溝、轍状の痕跡がともなう場合もある事例は、比較的広域単位の重要度の高い境界である道路として地域道Dとする。そうではない、硬化面が把握される程度にとどまるような吉田南構内428地点や238地点の事例などは(同4・5)を里道Eとし、管理主体や主たる通行者が地域住民の中でも、小規模な隣組的な部落単位であるものを想定している。私道Fは、宅地内の区画や畦道状のもので、属性としてはEに近似するものとする。構内遺跡では西部構内348地点の吉田泉殿比定地で検出した土堤状盛土遺構が、こうした範疇に属する事例とみたい。

以上は、現況においては古代～近世までの通時代的なものとして提出した。編年的な変

発掘道路遺構の分類試行と課題



1. 357 地点 SF1 北から・15 世紀後半～16 世紀
*掘り込み造成して礫敷舗装し、轍も確認される。



2. 261 地点 SF1 東から・18 世紀～19 世紀
*礫混じり土の路盤で、両側に側溝をともなう。



3. 111 地点 SF1 北から・近世
*礫敷舗装と、片側に側溝も確認される。



4. 428 地点 SF1 東から・近世
*硬化面上に、わずかに轍状の溝が確認される。



5. 238 地点東西畔北壁路面状盛土・近世
*細礫をまじえた堅く締まる砂質土の盛土断面 (矢印)。

図63 構内で検出された白川道以外の路面各種

遷を追跡することを主眼とした作業ではなく、道路遺構にみられる属性を、管理主体や関与集団のレベルを読み取る指標として利用することで、道路の背後にある社会組織や社会段階に接近することを志向している。道路遺構という考古資料をこのように通時代的に検討することで、ひいては時間的・空間的に生じている社会変化を浮上させることにつなげたいと考えている。

4 おわりに

以上に述べた試行は、数多く蓄積されている発掘された道路遺構について、これまで文献史料での記載や絵図資料を中心として研究されてきたと言える現状に鑑みながら⁽³⁾、あくまで考古資料として取り扱うとすればどのような方法があり、何を知ることができるかを考えた結果の、きわめて荒削りで実験的なものである。今後、既往の研究史的蓄積を十分に咀嚼しつつ、考古学の遺構論として洗練させていくことを目指すための、第一歩の叩き台として、不備を承知で敢えて提出したものである。諸賢の批判と叱正をいただければ深甚である。

〔注〕

- (1) たとえば、中世の白川道については、吉江崇「中世吉田地域の景観復原」『京都大学構内遺跡調査研究年報2001年度』、2006年など。また、近世の状況については、笹川尚紀「京都大学本部構内A T22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2014年度』2016年、において考察が深められている。
- (2) 京都大学総合博物館蔵。前掲注(1)吉江崇2006文献の図182参照。
- (3) 本稿作成時点で管見に触れた最も新しいものとしてたとえば、岡陽一郎『大道 鎌倉時代の幹線道路』（吉川弘文館歴史文化ライブラリー481）2019年

本稿は、2019年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号19K01094（「都市近郊歴史像の再構築—京都・白川道の研究を基盤として—」研究代表者・千葉豊）にかかる研究成果のひとつである。

表3 構内遺跡検出の道路関連遺構

構内	地点	地区	種別	遺構名	方向	硬化	舗装	掘込	側溝	轍	幅員(m)	遺構時期	分類	報告文献	備考
病西	39	AF14	発	道路跡	NS	○	○		○		4+	近世	D	報告Ⅱ	
本部	57	AW28	発	SF1	NE-SW	○	○	○	○	○	4.5-6	近世	B	S54年報	近世白川道
本部	75・89	AT27	発	SF1	NS	○	○	○	○		2.5	近世中期以降	D	S55年報	
本部	75・89	AT27	発	SF2	NS	○	○					近世	D	S55年報	
本部	75・89	AT27	発	SF3	NS	○					2	鎌倉以前	D	S55年報	
本部	90	AX28	発	SF1	NE-SW	○	○	○	○	○	4.5	18-19	B	S56年報	近世白川道
本部	95・99	AU23	立	路面								近世		S55年報	
吉南	111	AP22	発	SF1	NS	○	○		○	○	2.5	近世	D	S57年報	
本部	114	AS21	立	路面								中世近世		S56年報	
医部	143	AN18	発	SF1	EW	○	○		○		4	近世後半	D	S60年報	
吉南	167	AP25	発	SD1・2	NS				○			18		1986年報	側溝残存?
本部	168	AX30	発	SF1	NE-SW	○	○		○	○	4.5	13-15	B	1986年報	中世白川道
本部	181	AW27	発	SF1	NE-SW	○	○	○	○	○	4.5	18-19	B	1988年報	近世白川道
医部	190	AR19	発	SF1	NE-SW	○	○		○	○	1+	近世	B	1988年報	近世白川道
病東	191	AH19	発	SD1	EW							近世		89-90年報	側溝残存?
病西	192	AE12	発	SF1	NS	○	○				1	近世	E	89-91年報	
病西	200	AG14	発	SF1	EW	○	○				4	近世	E	1992年報	
医部	207	AM14	発	SF1	NS	○	○				2	近世	E	1992年報	
吉南	220	AO22	発	路面	NS	○	○				2	近世	D	1995年報	
病西	222	AF12	試	路面	NS	○	○				1	近世	E	1993年報	
北部	221	BF34	発	SF1	NS	○	○	○	○		4	16-	C	1994年報	
北部	221	BF34	発	SF2	NS	○	○	○			2+	14後半-	C	1994年報	
吉南	238	AR25	発	段差内m層	NS	○					2	16-17	E	1996年報	
吉南	238	AR25	発	SD1	NS						1	19	E	1996年報	
医部	248	AN20	発		EW							近世		1996年報	野壺列のみ
吉南	261	AN22	発	SD4	EW							15-16		2000年報	
吉南	261	AN22	発	SF1		○	○		○	○	4	18-19	D	2000年報	
医部	270	AO17	発	SF1	NS	○	○		○		2	18-19	D	1999年報	
医部	270	AO17	発	SF2	NS?	○						14-16	E	1999年報	
医部	270	AO17	発	SF3a	EW	○						14-16	E	1999年報	

表3 つづき

構内	地点	地区	種別	遺構名	方向	硬化	舗装	掘込	側溝	轍	幅員(m)	遺構時期	分類	報告文献	備考
医部	270	AO17	発	SF3b	NS	○						14-16	E	1999年報	
医部	270	AO17	発	SF4	NS?	○						14前半	E	1999年報	
本部	277	AT21	発	SF4	NE-SW	○	○	○	○		3.4	11末-13	B	2001年報	中世白川道
本部	277	AT21	発	SF3	NS	○	○	○	○		4-5	11末-13	C	2001年報	
本部	277	AT21	発	SF2	NE-SW	○	○	○	○	○	5-6	18-19後半	B	2001年報	近世白川道
本部	277	AT21	発	SF1	NS	○	○				4.2	19末	F	2001年報	帝大道路
本部	296	AU25	発	SF-N	EW	○	○	○	○	○	3+	14-15	B	2002年報	中世白川道
本部	296	AU25	発	SF-S	EW	○	○	○	○	○		13	B	2002年報	中世白川道
北部	297	BD28	発	SF1	EW	○	○	○	○		2	10半-末	B	2002年報	古代白川道?
医部	298	AR19	発	SF2	NS	○	○	○			3-4	12末13初	C	2003年報	
医部	298	AR19	発	SF1	NE-SW	○	○	○	○		2+	13-14	B	2003年報	中世白川道
吉南	302	AR25	立	SF1	NS	○					1.2	18	E	2002年報	
医部	308	AP18	発	SF1	EW	○	○		○		3	13-16	D	2003年報	
本部	329f	AV24	立											04-06年報	近世白川道
本部	331	AT22	立											04-06年報	近世白川道
本部	336de	AV25	立											04-06年報	中世白川道
病西	339	AF14	発	SX1	NE-SW	○	○		○		4	14後半以降	D	2007年報	
病西	339	AF14	発	SF1	NE-SW	○	○		○		3-5	13-14	D	2007年報	
西部	348	AW20	発	SF1	NS	○	○		○		3	18	D	2009年報	
西部	348	AW20	発	SF2	NS	○	○				4	15以降	D	2009年報	
西部	348	AW20	発	土堤状盛土	NS						2	13	F	2009年報	
北部	355	BH31	発	土手状高まり	WE	○					2.4+	15以降	E	2009年報	
北部	357	BG34	発	SF1	NS	○	○	○	○	○	5	15-16	C	2010年報	
医部	358	AQ18	発	SF1	NE-SW	○	○		○		1+	13	B	2010年報	中世白川道
病西	379	AH12	発	SF1-2	WE	○	○				2.4+	1620-1650	D	11・12年報	
病西	379	AH12	発	SF2	NS	○					3+	SF1-2よりやや新	E	11・12年報	
病西	379	AH12	発	SF1-1	WE	○					0.8+	18後半	E	11・12年報	
本部	383	AV27	立	近世路面										11・12年報	
病西	384	AH15	発	SF1	NS		○				2	近世後半	D	11・12年報	
病西	384	AH15	発	SF2	NS	○	○		○	○	2.2	近世	D	11・12年報	

表3 つづき

構内	地点	地区	種別	遺構名	方向	硬化	舗装	掘込	側溝	轍	幅員(m)	遺構時期	分類	報告文献	備考
病西	398	AH13	発	SF3	WE	○	○	○			1.5	17以前	D	2013年報	
病西	398	AH13	発	SF2	WE	○	○	○			1+	1680-1710	D	2013年報	
病西	398	AH13	発	SF1	WE	○	○	○			1.8	18	D	2013年報	
吉南	401	AM21	発	SF1・4	NS	○					1	15-16	D	2014年報	
本部	403	AT22	発	SF1・2	WE	○	○	○	○	○	5.8	13と18	B	2014年報	中近世白川道
本部	404	AU27	発	SF1	NS	○				○	1.5+	鎌倉以前	D	2014年報	
吉南	428	AP23	発	SF1	WE	○				○	4.5	近世	E	2015年報	
熊野	435	ZZ18	発	路面SF1	NS	○	○				1+	19	D	2017年報	
関田	455		発	盛土	NE-SW							13-15		本年報	盛土のみ
医部北	市道		立	路面								近世	B	*1	近世白川道

凡例（略表記例）

吉南：吉田南構内 医部：医学部構内 病東：病院東構内 病西：病院西構内

発：発掘調査 試：試掘調査 立：立合調査

NS：南北方向 WE：東西方向 NE-SW：北東-南西方向

幅員の表記：2+→2m以上

遺構時期の数字表記：13→13世紀

報告Ⅱ→『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅱ

S54年報→『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和54年度』

1986年報→『京都大学構内遺跡調査研究年報1986年度』

*1：百瀬正恒「17白河街区・京都大学構内遺跡」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984年